

リレーエッセイ

大学院ゼミナール紹介 日本中世史・蔵持ゼミ

朝比奈 新

蔵持重裕先生は、日本中世村落論及び情報論を専門とされている。先生の研究は、日本の中世社会の性格を、生活共同体である村落から解明しようとするものである。近年、出版され、幅広い読者に向けて書かれた著書『声と顔の中世史―戦さと訴訟の場景より―』（吉川弘文館、二〇〇七）では、「ことば（音声）」や顔の「表情」といった文献史料に残りにくい詞の持つ力などを検証し、歴史像の立体化を目指す試みをされている。このような広い関心から研究を続けられる蔵持先生のもとで、私たち大学院生は、文献史学のみならず、人類学的な視野を持った研究方法を目指し、日々学んでいる。

二〇〇九年度のゼミ履修者は、近世大和国の無足人について研究する者、源頼政一族を素材として平氏政権を研究する者、中世東国の寺院と民衆について研究する者、鎌倉期の悪党について研究する者、室町將軍と公家衆との関係

について研究する者、湯起請の終末期に関する研究をする者、『青方文書』にみられる鎌倉期の訴訟制度について研究する者と中世社会の世代間扶助機能について研究している筆者を含む八名が在籍している。また、蔵持ゼミには毎年、OG・OBの方々や、他大学からの聴講を含む多くの院生・研究者が参加している。ゼミ出席者は、多いときで十数名に達する年もある。

次に、具体的なゼミ内容について説明する。毎年、研究報告と史料購読の二本立てで行われている。一つ目は、院生を中心とした参加者による各自の研究テーマに即した報告を行う。報告の際、蔵持先生をはじめ、長谷川裕子先生・遠藤ゆり子先生等、先輩方からも貴重な御意見を頂戴している。また、院生各々の研究テーマが多岐に渡るため、議論が尽きないこともある。

二つ目は、史料を輪読形式で読み進めていく。前期の史料購読は、長崎県上五島町を本拠とした青方氏に伝わる『青方文書』をテキストとして使用している。内容は、鎌倉時代の所領・所職をめぐる訴訟文書、異国警固番役関係文書、南北朝時代の一揆契諾状、漁業関係史料などが中心となっている。毎回、細部にまでこだわり、史料読解に取り組むため、一回の授業時間内で、一文書が終わらないこともある。

後期の史料購読は、室町時代の公家である山科家の家司の日記『山科家礼記』をテキストとして使用する。長谷川裕子先生を中心に輪読形式で進めていく。内容は、山科七郷を主とした惣村の階層・合議制など、惣村の記述が中心となっている。また、家領からの年貢、関所からの収入などの記述がある。そのため、都市と地方の関係、交通・金融に関わる幅広い視点からの、積極的な発言が参加者には求められている。

蔵持ゼミでの主要な活動の一つが、立教大学名誉教授の藤木久志先生と蔵持重裕先生を中心として実施されるフィールドワークである。参加者は、蔵持ゼミの大学院生・学部二年～四年生のみならず、ゼミOB・OGの先生方や、学外からも多くの研究者・大学院生が加わり、多様な顔ぶれとなる。経験豊富な研究者の方々に交じって、学部二年生が調査に参加するのも、蔵持ゼミのフィールドワークの特徴の一つである。調査地は、二〇〇〇年から二〇〇二年まで現在の大府府貝塚市水間地域、二〇〇三年から二〇〇五年までが京都府和知町、二〇〇六年からは京都府宇治田原町地域を中心に行っている。二〇〇九年度に実施される調査については、八月の調査は前年に引き続き、京都府宇治田原町禅定寺・炭山地域、秋の調査は学園祭期間中に、滋賀県伊香郡西浅井町大浦・月出地域で実施する。

八月の宇治田原町禅定寺地域での調査は、明星大学小林一岳先生を代表とする文部科学省の科研費によるものと、藤木久志先生を代表とする村落交流史研究会のメンバーに、蔵持ゼミの院生六名が加わる形で行われた。過去三年間の調査には、学部二年生の演習で、『禅定寺文書』をテキストとして使用していたため、学部生も多数参加していた。二〇〇六年からの調査内容は、宇治市歴史資料館での文書整理・撮影、宇治田原町禅定寺地域での聞き取り調査、石造物調査を中心に行った。参加したほとんどの学部生にとっては、古文書に接触し、五輪塔などの石造物への採拓を行うことは、初めての経験であった。特に、今まで古文書を博物館のガラスケースの中でしか、見たことがなかった学部二年生が、写真撮影の際、古文書に直に触れることができて感動している様子や、石造物調査で、天正年間の碑文が入った五輪塔を発見したことを、興奮気味に話す光景は、調査のなかで最も印象深かった。

秋に実施するフィールドワークの調査地である滋賀県西浅井町宇大浦地域は、蔵持先生が二〇〇二年に出された著書『中世村の歴史語り―湖国「共和国」の形成史―』（吉川弘文館、二〇〇二）の中であげられた菅浦と大浦との相論の舞台である。高校の日本史の教科書にも掲載されるほど、有名な地域でもある。今回の調査の目的は、今まで史

料上の制約から、菅浦側の視点での研究が行われてきた。そのため、今回の調査では、大浦側の視点にも立ち、大浦と菅浦との関係を捉えなおしていこうという狙いがある。調査参加者は、学部設置科目であるため、学部二・三年生が中心となる。それにOGである先生方と大学院生数名が加わり、二十名近くが集まった。事前準備として、当日の聞き取り調査に備え、刊本史料上から、人名・地名を抜き出し、索引を作成した。調査当日は、大浦・月出地区の旧家での聞き取り調査を中心に行う。年中行事や生業・屋号・古地図などの確認と、文書撮影を行う予定である。

過去のフィールドワークの成果については、大阪府貝塚市水間地域の調査は『開発・環境の変化による山村・里村間の情報・交流と摩擦の研究』（科研報告書、二〇〇二）。京都府和知町の調査は、藤木久志・小林一岳編『山間荘園の地頭と村落——丹波国和知荘を歩く——』（岩田書院、二〇〇七）にまとめられている。

八月には、立教大学において、「中世・近世紛争史の現在」と題して、ヨーロッパ中世史・近世史と日本中世史・近世史の研究者が共同でシンポジウムを開催した。その際、蔵持先生が司会を務められた。ヨーロッパ中世と日本中世の村落間紛争についての類似性から、人類社会が紛争をどのように解決してきたのか、時間的・空間的に視野を広げて

考える試みがみられた。私達大学院生も、企画の段階から、如何なるシンポジウムになるか期待と不安の入り混じるなかで、準備をして当日を迎えた。このように、日本中世史以外の領域の研究者との活発な交流が行われるのも、蔵持ゼミの特徴の一つである。

以上、蔵持ゼミについて、本年度の活動を中心に紹介した。蔵持ゼミでは「去る者は追わず、来たる者は拒まず」を信条に、研究意欲のある者であれば、学内外・研究領域を問わず、常に快く迎え入れる姿勢でいる。このような風通しのよいゼミ環境が、学部生・大学院生のみならず、OB・OGの先生方や学外の研究者・院生も交えた多彩な参加者によるフィールドワークを実現させている。また、他分野の研究者の方々との共同でのシンポジウム等を開催することを可能にしたといえるのではないだろうか。来年度以降も、蔵持重裕先生を中心に、研究領域を問わず、広い交流を活かした研究が期待できよう。

（本学文学研究科史学専攻博士課程後期課程）